

Title	<大會抄録>南朝の地方軍府：幼王出鎮と長史行事
Author(s)	丹治, 昭司
Citation	東洋史研究 (1999), 58(3): 612-612
Issue Date	1999-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/155261
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

大會抄錄

南朝の地方軍府——幼王出鎮と長史行事——

丹 治 昭 司

南朝においては軍事的に重要な地方州鎮の長官に宗室諸王を任用することが一般的であった。これは地方に存在する強力な軍事力を確實に掌握して皇帝権力の強化・安定を圖るための方策であるが、實際には宗室（特に皇弟皇子）が長官に任命された場合、いまだ幼年で政治的能力に缺けている場合が少なくない。その場合、長官の開く軍府（都督將軍府）の長史が行府州事として實務一般を取り仕切ったのであるが、しかし、年少の長官と長官代行たる長史行事の間で軍府の實権をめぐる對立する事例も見られ、さらに劉宋・南齊兩王朝時期にあつては皇帝側近の寒人が典籤として州鎮長官たる諸王及び長史の行動を監視・掣肘しており、軍府内の權力關係は非常に複雑である。この三者の内、典籤に関しては從來の研究により多くが明らかにされているが、典籤の役割はあくまでも長官以下の監視であり、本來は軍府の運営に直接關係するものではない。

本報告では、年少の皇弟皇子が長官を務める州鎮に注目し、州鎮經營の實質的な責任者である行府州事たる軍府長史の考察を中心として地方州鎮の權力構造を明らかにしようとするものである。また、皇弟皇子の軍府長史の人選には皇帝の意志が強く働いている場合が見られることから、地方州鎮と中央皇帝權力との關係にまで言

及してみたい。

唐代淮南・浙西藩鎮における幕職官について

渡 邊 孝

唐代藩鎮の幕職官辟召制については、從來「唐宋變革」論の觀點から、それが所謂「新興地主層」の官界進出の足がかりとして機能したことを重視し、端的に言えば「貴族制に對するアンチテーゼ」としての作用を擔ったものとして、その歴史的意義を評價する説が一般的である。

しかし、近十年來の陸續たる石刻史料の公刊は、唐代官制研究に大量の新データをもたらし、新たな知見に基づく研究を生み出しつつある。藩鎮幕職官についても、それが唐朝中央官僚機構と密接かつ巧妙にリンクされ、むしろ昇進の捷徑として、すなわちエリート・コースの一途徑として機能していた實態が明らかになって來たのである。一方、崔・盧・李・鄭といった貴族大姓に關する精緻な個別研究は、彼ら門閥貴族が、強固な身分的・内婚制の保持等を通じて、唐末に至るまで、獨自の社會的身分として高い社會的・文化的ステイタスを維持していたことを明らかにしている。

本發表では、如上の論點を踏まえながら、淮南・浙西という、當時の經濟最先進地域に立地した藩鎮を取り上げ、その幕職官の初步的分析を通して、唐代藩鎮辟召制の實態とその機能について、問題の一斑を考えてみたい。